



カムイ橋付近のウチャシクマ

隣町三石には、町を象徴する天然記念物でもあり、信仰の山としても名高い「蓬萊山」がある。この創世については、イマニ・ヌプリと呼ばれ、フンベ（鯨）の伝説として、この地のアイヌの人びとが語り伝えてきたものが定説となっているが、浦河にもこれに似た話が、野深地方のウチャシクマ（昔話）として伝えられている。

むかし、この地方にまだ人間が住んでいなかったころ、天上からカムイがやってきて、恵まれた自然に富む日高の各地に村を造り、人の住める環境を整えることをしてくれた。

あちこちにたくさんの国を造ったカムイたちは、仕事を終えて天上に帰ることになり、最後の時を元浦川（ウララベツ）カムイ橋の上流で過ごした。

ここで国造りをしたカムイたちは、ヌサ（ご幣）を作って捧げ、いままで仕事が無事にできたお礼と、これから人間が住むであろう総ての国（村）が、平和で幸せに末代まで繁栄するようにお祈りした。そのあと、豊富な元浦川（ウララベツ）の魚を焼いて食事をし、やがて出現するであろう村々を思い、満足した心で遅くまで語りあっていた。翌朝いよいよ天上に帰るといことになり、ヌサやアペニ（焚き木）や、アペパスイ（火箸）、そして豊かな食事を提供してくれた焼き串をどうするかと相談をした。このままにしておく、結局は動物に蹴散らかされたり、大水で流されたりして、たいへん粗末にすることになる。だからこれを燃やしていっしょに天井に送るとともに、その跡を岩にして残そうということになり、ひとつは男の岩として高く、もうひとつは女の岩として低く残して、カムイ岳から天上へ帰って行った。



カムイが天へ昇ったと伝えられる岩
(高田剛雄様)

今のカムイ橋を渡って少し行くと、川の左側に向かい合って細長い大小二つの岩があるのがそれである。この二つの岩は、下で繋がっており、本当に誰かがつくったように見える。このためカムイがここから天上に帰ったところと、誤って伝えられてきた所以であり、それがカムイ橋の謂われともなっているという。

野深コタン繁栄のウチャシクマ

野深コタンは、カムイのおかげで豊かに暮らしてはきたが、どういうわけか子どもに恵まれることが少なく、このままではコタンがだんだん寂れてくるとみんな心配していた。そんなあるとき、婿さんを貰わねばならない家があり、三石の奥のホロケから婿さんを迎えることになった。

それで、野深からホロケへ迎えに行くと、その婿さんの家では、大きなサケシントコにどぶろくを作り、それを絞った粕（シャチシラリ）を大きなお膳にいっぱいいていねいに盛り上げてあった。

そして野深へ向かうことになると、その大きなお膳をもった人が一番先に歩き、二番目には婿（むこ）さんの守り神を持った人が歩き、三番目に婿さん、そして四番目には親が歩くという順で、ホロケから野深までずっと山道を歩いて来た。

この間、先頭のお膳をもった人は、ずっとオンカミ（祈り）を続け、道の両側にていねいにシラリを撒（ま）きながら、長い時間をかけてやっと野深に来たという。シラリを撒いてくるというのは、大切な婿さんに悪い神様がついて、悪戯（いたづら）したり、魔がさしたり、邪魔者が取りつかないようにということで、大変重い儀式であったという。

お蔭で、それから後は、野深のコタンの人口はふえて安定し、どここの家にも子孫が繁栄し、発展することができたという。

だから、ホロケのアイヌも野深のアイヌも、元を尋ねると一つであり、暮らしや祀り事にもたくさん同じものがあり、本当の身内であるから、ずっと仲良くしていくのがあたり前の事と教えられていたと言う。

この話は、内容から言っても近代的なものであり、浦川タレさんが語ってくれた浦河の秘話のひとつである。

[文責 郷内]

【話者】

浦川タレ

浦河町堺町東 明治三十二年生まれ（平成三年十月 没）

アイヌ神謡等口承をはじめ、幅広い民族文化の伝承者として浦河町アイヌ民族無形文化財の指定をうけ、北海道文化財保護功労者として表彰されている